

初期ハイデガーのピュシス論とその射程

森 秀樹

ハイデガーが構想したアリストテレスに関する著作は完成されることなく、原稿も残されていない。確かに、ナトルプ報告は、その片鱗を伝えていると考えられるものの、断片的であり、その原型となった講義に遡及することが必要となる。この報告の目的は、これらの資料に依拠しつつ、ハイデガーがアリストテレスから伝承(überliefern)したピュシスという根本概念を析出し、その現代的な意義について考察することである。

ハイデガーはSS1922の講義の冒頭で、解釈にあたっては解釈学的状況に注目することが重要であると指摘している。この言葉は今の私たちには自明ではあるが、かえって形式的なものとして、あるいは、せいぜいのところ、頭の中で遂行されるに過ぎないようなものとしてしか受け止められていない。それに対して、ハイデガーはこのプロセスを具体的に記述することに傾注し、それを思惟の営みそのものと見なしている。この解釈学的状況を形成するものとしては、まず第一に、アリストテレスを解釈するハイデガーを規定している同時代の眼差しがある。そして第二に、アリストテレスがその思索を遂行した状況がある。

一方において、前者の眼差しはアリストテレスへの眼差しを制限するものである。例えば、19世紀末の近代の眼差しからすれば、アリストテレスは存在論の偉大な始祖ではあるが、未だそれは粗雑な段階に留まっているとしか位置づけられていなかった。しかしながら他方において、そのような眼差しを乗り越える兆しも現れている。ハイデガーの存在への問いはブレンターノのアリストテレス書によって触発された。ただし、その事実はしばしば語られるが、その内実が検討されることはまれである。ブレンターノの範疇論は、アリストテレスの範疇論がどのような原理によって形成されていくのかを内在的に考察するものであり、範疇の生成論と呼ぶことのできるものである。ハイデガーが注目したのはこの側面であり、ラスクに多くを学んだのもこの点であったと考えられる。ハイデガーは、生成論を通して、同時代の哲学(生の哲学)に対処しようとしていた。次に、アリストテレス解釈において、大きな影響を及ぼしているのが、ラインハルトの Parmenides 解釈である。彼は Parmenides を存在の一元論者として解釈するのではなく、むしろ、一元論を成立させる状況に注目している。この着想は、Parmenides に対する批判としてのアリストテレス存在論という図式を乗り越え、両者がともに考えようとしていたピュシスとはいかにあるかを考える地平を切り開くものであった。同時代の状況は同時にアリストテレスへのアクセスをも可能にしているのである。

ハイデガーはこのような同時代の着想を手がかりとして、アリストテレスが思索を遂行した状況を再現しようとする。『形而上学』、『自然学』の解釈から析出されるのは、存在の見方がどのように形成されていくのかである。例えば、『形而上学』冒頭の解釈から析出さ

れるのは、単なる生の中で befremdet されて (=タウマゼインの翻訳)、試行錯誤を繰り返す中で、新たな眼差しが生みだされ、均衡が成立していく様である。それはアルケーを説明するものであり、テオリアである。ただし、それは状況依存的であることを忘却してはならない。それは befremdetsein との相関者なのである。このように、その都度の状況の中で、問題が発生し、それに応える中で、新たな観点が芽生えていく。

結局、ハイデガーは、自分自身の思惟の形成プロセス、アリストテレスの思索のプロセスの構造から、ピュシスという概念を解釈していることになる。確かに、近代的な眼差しからすれば、このような存在様式は、自然とは対比される人間的なあり方と見なされるかもしれない。しかし、そのような二分法こそ近代的な発想でしかなく、むしろ、このようなあり方をしたものはいわゆる「解釈学的状況」に妥当するもののみ限定されない。実際、アリストテレスが語り出しているのは自然のあり方である。この着想をうけて、ハイデガーもまた存在一般のあり方としてピュシスを考えている。ハイデガーの戦略は、ピュシスという着想から存在一般のあり方を解釈しなおすとどうなるかというものであった。それを実現しようとした試みの一つが『存在と時間』であったが、それは、すでに読み取られるべきもの全てを書き込んだ人間の存在論から存在論を析出するという論点先取を犯すことになるとともに、時間を解釈するにあたって人間的歴史の側面にのみ傾斜することになってしまった。むしろ反対に、ピュシス概念を具体的に検討していくことが必要であった。それは直接後期の思想を準備するものであり、現代の生物学の試みに直結していくものでもあった。